

尾瀬の自然保護活動の歴史

かつて尾瀬の地に心を奪われた人々がその風景を守ろうと決意して以来、尾瀬は自然保護の先駆的存在であり続けてきました。

江戸時代（1603～1868 年）には、植物が生い茂る湿原にやってくる獲物を目当てに、猟師や漁師がしばしばこの地域を訪れていました。会津沼田街道という北の会津地方と南の上州地方の間で食品などを運搬するのに使われた山道が尾瀬地域を通っていました。明治時代（1868～1912 年）の終わりまでに最初の山小屋が立てられ、尾瀬の地形は調査や自然研究の対象となりました。

1903 年、日本の近代化を迅速に進めるために必要な電力を供給するダムやトンネルなどの水力発電施設を建設する計画の一部として、尾瀬は初めて土地開発のターゲットとなりました。幸運なことに、自然愛好家たちが団結し、この計画を止めることができました。1949 年に尾瀬保存期成同盟が設立されると彼らの活動はより方向性を持つようになりました。

尾瀬における自然保護のアプローチの最も分かりやすい象徴は、国立公園の湿原の脆弱な表層を守る木道です。最初の頃は地点間に単なる丸太が置かれただけのもので、渡るのが困難でした。その後、丸太が割られて平たくなったことにより、より簡単に湿原を歩き回れるようになりました。1950 年代までには増大した訪問者による自然への悪影響が表面化するようになり、1952 年には木道の本格的な敷設が始まりました。木道は大部分が湿原の表層よりも高い位置に作られており、現在 54 キロメートルもの長さに及んでいます。

尾瀬ではかつて、道路開発が検討されたことがありますが、これもまた環境活動家たちによって阻止されました。訪れる人々が残していくゴミがこの地域に溢れ始めると、尾瀬は訪問者に自分のゴミを持ち帰ってもらうキャンペーンを始めました。キャンペーンは成功し、同じ問題に取り組む日本中の他の地域にもこの運動が広がりました。

ごく最近、尾瀬は地域の水質維持と太陽光発電などのクリーン・エネルギーの利用促進を目的とする施策を策定しました。公園スタッフやボランティアの取り組みを通して、そして訪れる人々の協力により、尾瀬はこれからも公園の自然を守り続けて行きます。